

『宮廷女官チャングムの誓い』（以下、『チャングム』と記す）、最後の場面。チャングムは破水し危険な状態だった妊婦に帝王切開をして、妊婦も赤ちゃんも救う。「きっとこれから先も、この女人は時代に逆らい続けるだろう。そして、この女人は時代に問い続けていくだろう。人の命を救ってなぜいけないかと」というナレーションが流れる。こうした外科手術がまだ行われていない時代、腸閉塞だった王の手術は、王自身にも周囲にも受け入れられなかった。ここでは成し遂げられたわけである。

これはもちろん、フィクションである。チャングムについては、その医女としての存在は明確な史実であっても、「余の体のことは医女チャングムが知るなり」の一文から王の主治医だったとするのは無理がある。医女としての活躍や女官としての過去もフィクションである。史実を骨格に細部を想像した、通常の歴史ドラマとは違っている。そこを誤解しては歴史認識を誤ることになる。

監督は高視聴率を獲得したドラマ『許浚（ホジュン）』制作中に見た資料の中でチャングムの名を見つけた。それがきっかけで制作したと語っている。許浚は、チャングムが生きた時代から約 50 年後、『東医宝鑑』など多くの医学的功績を残した、史実の明らかな人物だった。チャングムは天然痘の治療で功績を挙げるが、天然痘の進行をその時期と症状に分けて観察、体系化したのは許浚だったという。おそらく、それが現代韓方に受け継がれていて、それが『チャングム』の中での治療場面に生かされたのだと想像できる。

ところで最後の場面に至る、鍼麻酔の成功

からチャングムが手術をしたがる場面は、気に入らなかった。製作者の意図は想像できる。「時代に逆ら」う手術をさせたかったのだろう。チャングムの「命を救」うという情熱の顕著な成果で最後を飾りたかったのだろう。

同じく「時代に逆ら」うことだとしても、女性が王の主治医になる事とは種類が違う。死体解剖の知識も経験もなく、手術するのは余りにも安易である。生命力の落ちた人では術後、感染症に罹り易く、回復する力も弱い。

腹膜を切り、子宮を切る帝王切開の成功など、よく考えてみれば、極めて嘘っぽい。このドラマでは、「命を救」う為の選択肢に手術を入れてはいけないのである。最後までそれ以外の手段を模索すべきだった。

現代では西洋医学の成果で、手術は極めて安全なものになった。ただ東洋医学の立場から見ると、安易に手術が行われ過ぎている様に見える。悪くなった組織を切り取れば、全ての問題が解決するわけではない。組織を悪くしたからだの状態が診られていない。その状態を改善すれば、その組織も回復するかもしれない。

理念的には東洋医学でも手術は考えられる。鍼灸や漢方薬などで変えられない不可逆な状態となった場合だ。ただ西洋医学はその性格上、早くから物質レベルでの研究が進んでいた。そこで東洋医学者はその点について、西洋医学に多くを学ぶことになった。日本では江戸時代、漢方流派の中で実学を重んじる古方派が解剖に関心を持った。吉益東洞を世に出した古方派の山脇東洋は、刑死体を解剖し日本最初の解剖図誌『蔵志』を著した。またやはり古方派の華岡青洲は西洋医学を学び、世界初の全身麻酔手術（乳癌）に成功した。（2008年11月）